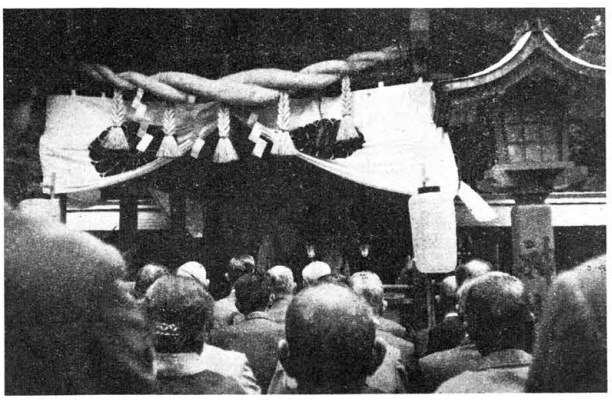
宗像
毎月一五日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ㊟ 1311 代
定価一年送料共 1000円

沖・中両宮春季大祭

筑前大島

宗像大社中津宮・沖津宮遙拝所



写真説明　(右)大祭参拝者で賑う中津宮御一頭。
(下)沖津宮遙拝所で浦安舞を舞う巫女。

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二一三一 (〒八一三)
電話福岡(〇九二)六五一―九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入 (〒六〇〇)
電話京都(〇七五)三五一―二一二一(代)～三番

沖・中両宮春祭り完る

新緑鮮かな五月一日、筑前大島で、宗像大社沖津宮並びに中津宮の春季大祭がそれぞれ盛大に斎行された。沖、中両宮の大祭は、旧暦三月十五日に執り行われるため毎年月日が異なっている。

この日、早朝から五月晴れの天候に恵まれ、その上旧暦日と重なったため参拝者が多く、神湊・大島間の渡海船乗天丸は超満員となり、臨時便が増発され、参拝客と釣り客との輸送にあたっていた。

大島村は中津宮様の春祭りとあって、一村を挙げて漁止めを行い、家々の間には日の丸が掲げられ、村中祭りを楽しむ人々で賑った。

中津宮参道には、幟りが風にはためき、拝殿には真新しい黄色の御簾が掛けられ、拝殿の床は掃き清められて清新な気分が境内に満ち満ちていた。

祭典は、これより先の前日、午後三時、地主祭から始められ、境内を守り給う地主の神に報謝の祈りが捧げられた。午後五時には、大島北側岩瀬部落に在る沖津宮遙拝所と中津宮に於てそれぞれ宵宮祭が執り行われた。翌日午前八時半には、島の東側宮崎部落に鎮座する末社厳島神社で春祭りが行われ今年の大漁が祈願された。

午前九時、沖津宮遙拝所に於て海上四十九カロ離れた遠かな沖ノ島の沖津宮に向って海の幸、山の幸が供えられ、浦安の舞が奏せられて、多くの参拝者の熱祷が捧げられた。この日快晴とはいえ、春霞の彼方に沖ノ島は没し、沖ノ島さまをはっきりと拝むことはできなかった。

午前九時半、大島で最も高い御嶽山々頂に鎮座する摂社御嶽宮の春祭りが行われ、農業協同組合関係者と崇敬者多数が参列し、今年の豊作と商売繁昌を祈願した。この頃から天候はくずれ始め曇り空へと移り変っていった。

午前十一時、中津宮に於て春季大祭が執り行われた。本殿前には大島の各漁船から数々の献魚が供えられた。幕津宮の祝詞の後、浦安舞が巫女により奏せられ、沖、中両宮奉賛会長、村長を始め村の代表者、また内陸各地からの崇敬者多数が玉串を供え敬虔な祈りを捧げた。この後感謝状の贈呈に移り、大島村の献上若布採取者及び裏参道工事奉仕者に感謝状と記念品が贈られた。

直会は参道下の照海殿に於て盛大に行われた。

午後一時半より照海殿舞台に於て宗像郷舞踊協会役員六名により奉納舞踊が行われ、満員盛況裏に終演した。この頃から雨模様となって、数々の祭行事は煙むる様な雨の中に終了した。

海上安全大漁を祈り　龍宮祭斎行

風雲る五月晴れの五月三日、中津宮鎮座の大島で龍宮祭が斎行された。この祭は、島の西南、津崎建つ石の祠の前に一同整列し祭典の浜に鎮まります龍宮神社の例祭であり、古くから漁業の神様として漁民の厚い信仰のもとに続けられているお祭である。

午前十時、「叶上安全」、「叶大漁満足」の幟を立てた、第一金比羅丸、第二金比羅丸は、当社神職二名・大島漁業協同組合長以下漁協役員、大島村村長、宗像大社沖中両宮奉賛会役員をはじめ、一般参列者多数を乗せて波止場を出発、海路賑々へ向う。

新緑の山々と、群青に広がる、波一つない海原、船上を渡る爽やかな風を背景に船足も軽く一路祭場へと向うほどなく津崎の浜に到着。祭場前の海には、幟と大漁旗で満船色に飾りたてた数隻の漁船が二行を出向え、お祭を待っている。伝馬船で渚に渡り、渚に一同これに合せ、龍宮神への報謝と、海上安全、豊漁とを祈念した敬虔な祈りを捧げ祭典を了えた。

一同献供の神酒を撤下拝戴。小憩の後、再び船で波止場に帰り、引きつき漁協二階の広間で直会の宴が催された。

冬の間続いた鰤漁も終り、春から夏への漁の変り目にあたるこの祭りは、大島の人々にとって夏の到来を告げるまつりとなっている。この日島内の漁船は全て漁止めとなり、各所に座が設けられ、酒宴のうちに人々は日頃の労を互いにねぎらい、新しい漁への決意を互に誓い合い、心愉しい、和やかな一日であった。

論説　雲上神話と史上神道 (中)

═女子大生レポート═

B、神話の筆録

神話は必ず依って創作されたが、また逆に依って厳粛に伝承されて行った。古代の風習では、変革は許されなかった。即ち、風習の変革は神に対する冒瀆であると信じられていた。況んや、神の言語たる神話に改変が成立しないのは当然であって、その改変は直に神徳の侵害を意味したからに他ならない。

併し、また他面、人智の向上と社会の発展とに随伴して、自ら神話の改変が決行されたことも否定出来ないであろう。特に集団が他集団に包容された時には、神話の著しき改作結合の措置が講ぜられたことも推測に難くない。扨て、後世、この双の後から伝承を機能とする職掌部諸なるものが発生してゆくのであるが、やがて文字が伝来するに及び、この諸部なるものの機能も著しく退化して行ったのである。

かくて奈良朝に至ると、伝承がすっかり筆録に飛躍して遂に古事記・日本書紀の撰録を見るのである。そして伝承時代には神話は流動的であったが、記紀に筆録されると全く固定化されてしまう。大体推古朝までは、諸部の伝承が未だ威力を保持していたが、推古朝頃から政治も遂に成文主義に飛躍している。古事記が推古朝までを記述したことは、それが「口々相伝前言往行存而不忘」なる伝承時代の歴史であることを示唆する。しかも記紀の出現については、単に伝承が筆録に飛躍したと言う意義のみに終らない。蓋し、神話は漸次大和朝廷のそれに統合統一化されたのであるが、尚被包容集団の首長等一所謂諸国の国造や、物部大伴蘇我など中央貴族一の家には、秘かに各々の神話を温存していたのである。

この故に、真に国家を統一して皇化を普布くことの前提として、ここに先づこれら残存神話の朝廷神話への統合が要請されてくる。この要請に応えて元明朝に古事記の撰進となり、ついで元正朝に日本書紀の撰録となった。かくて神話は、文書として歴史の中に記録されて行ったのである。従って、日本神話の独自性は、天祖を中心として総合統一された、その形式の性格にある言うべきであろう。この統一された全的精神は、誠に天皇を「日本国の象徴」日本国民統合の象徴と仰ぐ現代憲法の精神とも照応して、今日尚政治的道徳的社会的に生きていること、ここに改めて論及するまでもない。

C、万葉集にみる皇室観

「やすみし、わが大君のたかしらすやまとの国は、すめろぎの神の御代よりしきませる国に」

しあれば、生れまむ御子のつぎつぎ天の下しろしいませ、やほよろず千とせをかねて定めけむ…」(巻二悲嘆美放郷作歌)

皇位が遠遠の昔から無尽の未来にかけて、世襲的に継承させることを歌ったこの歌は、神代の物語に基づく万葉歌人の皇室観を良く表わしていると思う。皇室の本質が大八島しろしめすところにあり、その地位は遠い昔の皇室からの一筋の血統によって継承されるというのが、天孫降臨の神代の物語の根本精神だからである。また万葉集の歌には、事物の起源を神代よりとか、オホナムヂスクナヒコナの時からいったような言葉で表現している。このことは前述したような神代物語の根本精神が、当時の人々の常識として心にしっかりと溶け込んでいた為だと思われる。

「天地のはじめの時し、久方の天の河原に八百万千万神の神集ひ集まりて、神議り議り時に、天照ひるめの命天をばしろしめすと、葦原の水穂国を天地のあひの極み知らしめす神の命と、天雲の八重雲おしわけて神降し坐せまつりし高照す日の み子」(巻二日皇子尊殯宮之時作歌)人麿、貴族や地方的豪族などの有力な諸氏族のすべてが、皇室のかうものであることを信じ、皇室に対して親近の情を持っていたことも、このような歌を詠む原因となったのではなかろうか。皇室の墓忠によって作られたのではなく、知識人としての諸氏族が事実としてとらえていた思想の表現なのである。然し、上代の人々は「現つ神わが大君」とか、今の大君を「神のみこと」といったり「神のみ代」といったりしているけれど、天皇を神として宗教的に崇拝するのではなく、地位の敬称として用いているようである。

(以下略)

阿蒙少言

豊後の温泉宿からパンフレットが来た。余白に一字のあるのに気づく。老父独り旅のいたずら書となれば、どうせ頭のない世相観人生観死観の断片にきまっている。●曰く「つれづれなるままにとことわれば、鬱ぐ岡の兼好和尚になるが、どこのボロ神主もクソ坊主も金もうけ肩書がし懸命の当世風と異つてノンビリ山河を楽しんでいただろう。こちらも同じ」が、書き出しであった。●どの人生もその帰結い特典はない。地球をおさらばの線香となれば、一切の憂憎の絆も絶たれる。そして棺を敲って最期を飾る。その一が弔辞というテマシ。富貴顕職も匹夫匹婦骨も変るところなし。●山間の温泉に親しむ。山菜を腹一杯喰って、珈琲に砂糖たっぷりの欧風茶道を楽しむ。千利休の頃に珈琲があったら、彼も飲んでこれにも「わび寂」の美しさを探ったかも知れない。嗜好趣を茶の心とするは、東洋独自のもので、紅茶珈琲ではわび茶の味は求め得ぬと喚けたじの先生までが言う。●思い出した。千利休が死の直前に書いたと伝える所謂遺偈の写を懸軸にするとかで、筆筆を求められたことがある。茶道先生には贅沢屋が多い。衣裳道具に凝り表装に万金をかける。泣くのは少言子四苦八苦の矛筆であろう。●弟子たちを集めて茶会を派手に催す。ちょっぴり聞き覚えの千利休が創めた茶道、わび茶の心を説く。話す方もわかっていないのだから、聞く弟子にわかろう筈がない。ただ利刀に立廻れば、弟子が増し月謝が多くなる。利休は悲人と崇められてよい。●雑言の結びに老友曰く「宿にパートタイムの農家の主婦らしいのが来る。雑誌がロビーにあれば注文つけたら、漫画三冊を持って来た。元来ちらが漫画人生なのに、学生好みのオトボケ雑誌まで読む気はない。

(白雲)

第二九回　宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

深田 中野 節子
子等は皆よき暮しせり健かに一生の涯の音の安らぎ

福間 廣渡 一寸毛
露深き草踏みたり舗装路にわが靴跡の濡れてつづけり

香椎 桜井 ツ子
けふの日がながくかかりて二の岳の肩に沈むまで自守りておりぬ

津屋崎 谷口 礼子
眠り誘う春の夜にして寝台に足伸く孫犯がに泣く

宗像 中村 幸
自が乳房踏み傷つきたりし牛の話きるところ阿修羅に

宗像 力丸 一郎
大島の千人参りの杖の列静けき山に詠歌がなしつ

宗像 吉田 直志
春の海緑にけぶる島恋ふて訪のふ人の波止場にみつる

武丸 原田 イノ
いつの日か無くせし鍵錆びつきて夫の堀出す堆肥より出ず

宗像 八波 五月
百遍みまわり給なければ不足なき齢なれど悲しかるべし

津屋崎 占部 由久
昨日二花の盛りと思ひしにはや瑞々しき桜桜となる

東郷 田中 春子
木蓮の咲きゝわまりて白き弁をふるわせおりぬ風吹き止まず

宮田 片山 一七草を摘みて緑の粥を食ふみやびやかなるいにしえしのび

宗像 原田まつ代
裸木の中に可憐なる山茶花の弥生日浴びし残花いとしき

宗像 天野トモエ
くもりなき月下に映ゆるわが庭の桜を二夜三夜とながむる

田熊 今村 重刀
菜種梅雨ようやく晴れし朝の陽に萌ゆる若葉の光りかがやくをかける。泣くのは少言子四苦八苦の矛筆であろう。●弟子たちを集めて茶会を派手に催す。ちょっぴり聞き覚えの千利休が創めた茶道、わび茶の心を説く。話す方もわかっていないのだから、聞く弟子にわかろう筈がない。ただ利刀に立廻れば、弟子が増し月謝が多くなる。利休は悲人と崇められてよい。●雑言の結びに老友曰く「宿にパートタイムの農家の主婦らしいのが来る。雑誌がロビーにあれば注文つけたら、漫画三冊を持って来た。元来ちらが漫画人生なのに、学生好みのオトボケ雑誌まで読む気はない。

(白雲)

玄海 永富 臻
底じめる砂業踏み来て視得方の古墓の文字をたどりつつ読む

宮田 片山 朔子
幾日か籠り居し寒の和らぎて庭木の蕾にフキのとう見ゆ

宮田 北原 君子
雲むさ洒に乾くサンダルが潮満ちくるに動きはじむる

田島 楠 理
夫りも三十年ながらえて今日の法要懇に営む

田久 立花 勇雄
今日よりは木の香も高きい居部屋起臥ともに脳裏をかすむ

福間 石松や寿子
風寒き村にも町にもひるがえる鯉のぼり見つ列車の窓ゆ

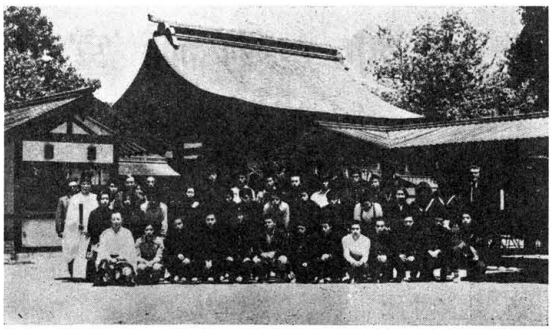
田島 吉武 武雄
宵に降く心地に過す三階の窓より見ゆる上弦の月

武丸 立石ろせ乃
すくすくと伸びるを頼み嫡めれし松の盆栽を人はほめゆく

田島 楠 理
奥山に紅一点の山桜人に知られず独り散り行く

名古屋 野崎 傳三
茶むろの妻折傘の下風にうた花筒の卯の花ゆるる

昭和五十二年度
宗像大社奨学生決定奉告祭斎行



今上陛下、御誕生日の慶日にあたる四月二十九日午前十一時三十分より当大社本殿に於いて、昭和五十二年度宗像大社奨学金受給者決定奉告祭が厳斎厳修に引続き斎行された。

当日は天候に恵まれ新一年生十四名をはじめ二、三年に進級の先輩二十六名、父母多数も参列し、奉告祭詞奉上の後、新奨学生の代表として「日本民族伝承の美風を昂揚し郷土の人材育成に貢献する。」という趣旨により、郡内在住の子弟で郡内中学校を卒業し高等学校（又は同等以上の学校）に在学する学生に対し給付、その勉学を援助することを目的に制定、運営されている。

奨学生選定は郡内七中学校（昨年度より日の里中学校創立のため一校増える）の校長推薦により各学校二名宛（男女別なし）選定されている。第一回（昭和三十四年度）より数えて本年度は第十九回に当り、奨学生も三三名の多きに達している。

本年度奨学生の氏名は次の通りである。

……◇……

出身校　氏　名　高　校
玄海楠　芳哉　宗　像
〃　中武　賢治　東海第五
大　島　古加　広喜　福工大附属
〃　福崎　浩信　東福岡
〃　福間　達明　西南学院
〃　山本　豊樹　福　岡
宮崎　武之　福岡農業
〃　本田　美幸　古　賀
〃　中央　秀治　宗　像
〃　花田　和幸　香椎二業
〃　尾園　政男　香椎二業
〃　門司　広道　博　多

以上十四名

◇

!!本年度卒業生より奨学金え金一封寄与さる!!

日の里　森山　知紀　新　宮
〃　丸山　尚士　ラ・サール

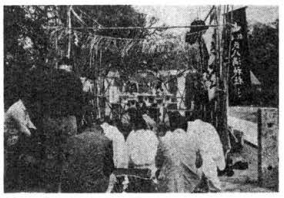
以上十四名

宗像大社奨学生として今春福岡県立福岡高等高校を自由度く卒業された、斎藤隆夫君（福間町東福間団地在住）が来社され、神前へ高校生活三年間無病息災に学業を了えた感謝と報告を行い、後輩の学業への一助にと金一封を寄与された。当社では同君の厚志を有難く受け奨学金の基金に組入れ、今後の奨学生への浄財に充当致します。

同君は昭和四十九年に福間中学より福岡高校へ進学され、当大社第十六回奨学生となられ在学中は学業入格に秀れ、今春の大学受験には難関の九州工業大学（国立二期校、北九州市戸畑区）へ現役で合格、専門分野の学業に精励されている。

係わり紙面をもちお礼申し上げますと共により一層の御健闘を祈念申し上げます。

氏八幡宮 春季大祭斎行さる



当大社とゆかりの深い田島鎮座氏八満宮の春季大祭は四月二十三日正午厳粛裡に斎行された。

氏八満宮は、大宮司氏員がその継母と姉菊姫の怨霊を慰めるために旧田島村に奉祀したもので、宗像記に、「神に祝して奉て、怨霊を収めんとて、田島の里にやしろを建て、八幡宮と祝ひける」と記している。

当日氏八満宮の神輿は高宮戸畑にある御本殿を出御、田島氏子総出で供奉し、正午、当大社境内の御旅所に着御、厳かに祭典が行われた。

尚、清明殿では玄海町農協婦人会の舞踊等があり大いに賑った。

神輿は午后三時、御旅所を発御釣川沿いに御神幸され、滞りなく祭典は終了した。

◇四月　社務日誌◇

一日　春季大祭　第一日祭　午前十時
第二、三宮祭　午前九時
二日　春季大祭　第二日祭　午前十時
献上若布奉仕者感謝状授与式
「神号額」奉納者感謝状授与式
博多人形「浦安舞」奉納者午后一時
護国神社春祭　午前十一時
献茶祭（南坊流）　午後二時
三日　奉納剣道大会　午前九時より於本殿内
王子神社春祭（南郷）午前十時
出光興産㈱会長石田正實氏、社長大和勝氏、副社長出光昭介氏新任奉告祭参拝
四日　宮地嶽神社春大祭
葦津宮司参列、職員二名勤勤
香椎宮弓司本下祝夫氏参拝
五日　出光興産㈱徳山製油所、同油槽所、出光石油化学㈱徳山工場内宗像神社春祭
七日　出光興産㈱福岡支店新入社員十三名参拝
十日　宗像警察署交通安全指導、於第二、三宮駐車場
八光流柔術奉納演武　於本殿
十三日　新出光石油㈱宗像神社春祭斎行
十五日　出光興産㈱門司支店社員研修
月次祭　午前十一時
日祭運送㈱月次祭　午前八時より
出光興産㈱下関支店長、同社千葉製油所々員四名参拝
十六日　織幡神社春祭（鐘崎）午前十時
十七日　出光興産㈱宇部出張所々長山下守氏外十五名参拝
十八日　神社庁宗像支部例会於斎館
二十日　西日本地区自衛隊連部長十八名参拝
福岡県警察本部交通部長原田達夫氏外四名参拝
玄海町成人学級菊部会　於斎館
二十一日　玄海町成人学級短歌部会於斎館
二十二日　木下祝夫氏（香椎宮々司）「古事記ドイツ語訳」出版祝賀会於福岡市、葦津宮司以下職員五名出席
二十三日　ボン大学（西ドイツ）教授ソアヘルト氏夫妻参拝
二十五日　出光興産㈱本社店主室研修会高良大社講座（二十六日）奉祝祭（二十八日）葦津宮司参列
二十九日　天長祭　午前十時
奨学生決定奉告祭並に懇親会

以上行

おトイレと銃弾

少々古めかしい話だが、戦場の漫談を記憶から引き出してみる。兼好法師をまねるつもりがあったとしても、とても徒然草は生れない。軍服のおトイレ物語は決して武勲絵の四コマ話でもなく、勇猛果敢などは他人様の芸で、こちらは露天用便に力んだお笑いを残している。

今時、便所と書いた標示は見当たらない。お手洗・化粧室となっては、臭い物臭を処理する感じはないとする。女中をお手伝いさんと呼ばねば人権問題になりかねない世の中、化粧室に気格してよいが、出陣前に書いた彼の養尿瓶が文壇の登龍門芥川賞に選ばれて、彼は軍司令部の報道員に採用された。風景麗しい杭州の西湖に銃声が鎮った頃、幕半は報道部に「兵隊」と名づけた陣中雑誌を始めた。月刊で、中野実等の文人も編集に加って次第に戦場文学の面目を向上していった。

軍当局は長くなる駐屯生活に、将兵の士気昂揚と文筆を書いた。勿論「兵隊」に投稿のうるおいを考慮したものであろう。将励もあった為、原稿もやる気に入って、軍司令部に顔を出せとの連絡があった。

暇をみつけて報道部を訪ねたことがある。今日、外国の軍隊には女性も多いようだが、当時はそうではなかった。なくても用は便じないわけにゆかぬ。手を洗ったことのない野原のお手洗、そこで演じたさまざまの非喜劇は、今も記憶に新しい。露天用便を「きじうち」と言ったのは関係職員より支給についての諸説明の後、父母も交え当大社用意の食事を囲みなごやかな内に午後一時過散会した。

この宗像大社奨学金は昭和三十四年に皇太子殿下御成婚を記念して「日の里」「丸山」の両篤志家より金一封寄与されたのが始まりで、爾来毎年寄与されている。

残筆しがらみ草紙　(5)
玄陽隠士

野戦生活を続けていたと聞くが、出会ったことはない。彼女もまじうちは謡げられない。女性たからといって囲いのあるおトイレの急造など思いもよらない。

そこで「きじうち」と題して美美子女史と竹姿を結びつけて原稿を書いたのである。

その理由はうであると説明するまでもなかろうが、銃弾さえ飛んで来ないまでも、静かな竹姿をいつも探すわけにはゆかない。急に敵味方の射撃が激しく起る。竹姿は実に物凄くなる。一発が何本の竹に殺気に変れば、汚れた軍服の顔も晴々としている。

所々に部落がある。壁に「東洋美子女史の従軍は珍しい存在であった。彼女が竹姿で雉を撃ったかどうか、見たわけでも聞いたわけでもないが、竹姿のきじうちは誰もがやりそうで、竹姿は禁物の事情にある御本殿を出御、田島氏子総出で供奉し、正午、当大社境内の御旅所に着御、厳かに祭典が行われた。

尚、清明殿では玄海町農協婦人会の舞踊等があり大いに賑った。

神輿は午后三時、御旅所を発御釣川沿いに御神幸され、滞りなく祭典は終了した。

幕半の「麦と兵隊」の主題歌として前線銃後ともによく唄われた徐州作戦の転進「シャレタク句に振りかえりゃお国なまりのおけさ節、鬨がほえむ麦畑」の毎日は、山谷なく竹林を見す畑作の平原が続く。杭州西湖畔で煎問に来た渡辺は美子の花売娘を聴いて林を住家にした彼等は、当然数の中におトイレの設備を持っていたことだろう。けたたましい銃弾は飛び込まず、清風颯々いい心持でこれもない平原の行進「きじうちは用を済ますなら妙楽も浮んでくる。時々頭上を激しい音を残して飛ぶ弾丸の竹姿おトイレでは、びくびく首を縮める苦笑の外には何もない。銃声よりおけさがよい。

絶海中津　（その二）

絶海が嵯峨野の天竜寺に帰りついたのは夜明けに近かった。

窓園に星々と立つ松樹を眺めていると鳥の羽ばたく音がした。ふと感興をおぼえ詩句が口をついた。

月夜に枝を綰れども
依るべき無ければ
翩翩たる隻影は　只
南にのみ飛べり

ここまでは出来たが後が続かぬ、詩想にふけりうとすると明継の顔が脳裏を去来する。日課の勉行をすませ自室に閉じこもり、先刻の詩句を流麗な書体でしたためた。

〈さて、どうするか〉

手っとり早い方法は将軍に明継がかっての呉王の遺児であることを吹聴し、これを捕えて明国に送還する。〈策の下だな〉これをやれば、大内との確執は免れ難いものとなる。とすると折角実現しかけている今川貞世の九州探題解任問題ともからみ合い、西国の政情は思わぬ方に動きだすかも知れない。〈ここ暫く様観をするか〉絶海は自分をなだめた。

明継の京都での生活は、碧眼の女人によって華いだものとなった。被衣で面をかくした女人を伴って明継はしばしば街へでた。薄絹を通してかいま見る春眼と形のよい姿態は、道行く人々の目を見開かせた。突如、女人がくるりと振り返った。その瞬間、明継は驚いた。これが美か、常日頃、身におびているものだけに強烈な美意識を感じた。

〈新しいものですが千五枚正です。お求めになりませぬか〉十年五枚正、後世、彼のうった刀は徳川家康によって「村正の刀は徳川家に祟る」とされて極端に忌避されたため妖刀として有名になった。

家康が祟ったのにも理由がある。まず、天文四年十二月、家康の祖父清康が、家臣岡部弥七郎のために村正の刀で切り倒されたのが最初で、天文十四年三月、こんどは家康の父忠が岡崎城内で乱心した伝馬沼若松八弥のため村正の脇差しで殺を刺された。また天正七年九月十五日、家康の長男信康が織田信長の怒りに触れて切腹したが、これも村正の刀であった。

そういうわけで村正の刀を愛してひそかに愛蔵したり佩用したものは村正の銘を削って、作風のうぐいす似た平安城長吉作と称することが行われていたようである。また徳川家に祟りをもつものは、好んで村正の刀を帯用したと言われている。

由井正雪が用いていたと伝えられるのがこれである。〈欲しいか〉と女人に問うと、刀をみつめたまま黙ってうなずいた。何かの気紛れであろうと思い、主人に大館晴光によって「村正の刀は徳川家に祟る」とされて極端に忌避されたため妖刀として有名になった。

家康が祟ったのにも理由がある。まず、天文四年十二月、家康の祖父清康が、家臣岡部弥七郎のために村正の刀で切り倒されたのが最初で、天文十四年三月、こんどは家康の父忠が岡崎城内で乱心した伝馬沼若松八弥のため村正の脇差しで殺を刺された。また天正七年九月十五日、家康の長男信康が織田信長の怒りに触れて切腹したが、これも村正の刀であった。

そういうわけで村正の刀を愛してひそかに愛蔵したり佩用したものは村正の銘を削って、作風のうぐいす似た平安城長吉作と称することが行われていたようである。また徳川家に逆意をもつものは、好んで村正の刀を帯用したと言われている。

この時に使われた刀も村正であった。慶長五年七月、石田三成が家臣井秀望が家康暗殺をはかっていた矢先であった。この日から数日ののち、明継は小早川秀秋の裏切りに呼応して毛利勢の吉川広家の陣営に入った。

九年、長崎奉行中重義に罪があって家宅捜索をしたところ村正の大小二十四腰が発見されたため、幕府は罪をさらに重くし、子供の源三郎もろとも死刑にしている。

その夜、刀師の届けた村正を作りにすかして改めてその美しさに感嘆した。やや腰反りの刀身は優雅な姿で、ふくらは枯れ、しのぎ高く、棟のほうは重ねが薄くなっていた。刀を観る明継の側で、その輝きにうっとりと魅せられた女人を見て、これは両いになるかも知れぬと刀の別の用途が頭にひらめいた。従来、吾邦からの輸出品は銅、硫黄などの鉱産物が中心であったが、何か自発的な貿易はできないものかと常日頃から考えていた矢先であった。この日から明継は、いや明継の夫婦川照亮の書状をうけとった。その書状には大内領内の経済体制を貨幣経済に切りかえたいが、その為には大量の中国銭を必要とするので、その手だてを頼むと認めてあった。

明継は刀を貰いあさった。このするものがいたら徳川家を呪うものとして厳罰に処せられた。寛永通寺銭などの銭貨は、この明継の動きは同斉によって逐二絶海の耳に入った。

こうのかなと湊
(68)
楠　早鳥作
福田長庵画

宗像神社春祭り
各所で斎行さる

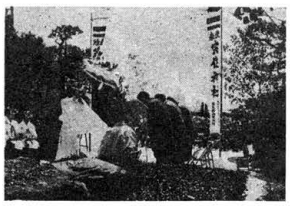
桜花咲き匂う四月、当大一御祭神の御分霊を奉斎する当地に営む会社の庭内・宗像神社春の例祭が各所で盛大厳粛裏に斎行された。

◇徳山宗像神社祭◇

恒例による出光興産株式会社徳山製油所外二社の庭園に鎮座する宗像神社の春季大祭が四月五日当社宮父称当以下神職・巫女奉仕のもとに執り行われた。

先づ午前九時三〇分より出光石油化学株式会社徳山工場鎮座宗像神社春祭が増森当一工場長外五十数名の新入社員参列のもとに厳かに斎行された。つづいて製油所鎮座宗像神社春祭は午前十時三〇分より祭典を開始、同製油所野口悠紀男所長外百余名が参列、斎主祝詞奏上のあと浦安舞を奉納、ついで製油所の繁栄と安全を祈って代表の玉串が捧げられ祭典は滞りなく終了した。

このあと同社大浦油槽所の小高い丘に奉斎されている宗像神社の春祭が斎行された。折から同油槽所は油タンクの新設及び補修作業が行われていて、工事担当の鹿島建設株式会社の作業員も油槽所々員と共に参列。工事の安全を願って敬虔な祈りが捧げられた。



◇新出光宗像神社祭◇

陽春の去る四月十三日午前十時より、新出光石油株式会社本社五階に鎮座する宗像神社春の例祭が総社より神職三名出向奉仕のもとに厳粛に斎行された。

祭典には同社代表取締役副社長、田尻輝範、若杉健太郎両氏をはじめ重役諸氏、社員代表等多数参列のもと神前に新出光石油株式会社・関連会社の業務安全、繁栄を祈念し、両副社長の玉串拝礼を行い式後、社員代表が玉串拝礼を行い式次第も滞りなく終了した。

出光社員研修会
―本社店主室・門司支店―

当大社春祭も無事終了し、樹木の若芽も青々とした境内に急に白衣白袴姿の神職さんが増えた感のする今頃、それもそのはず出光興産株式会社の本社店主室教育生の春の研修と、今年度新しい試みの同社門司支店の社員研修があい前後して四月十三日～十八日と、二十四日～二十七日の両期にわたって行われたのである。

◇本社店主室研修◇

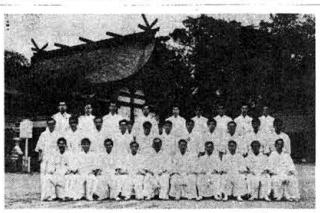
出光本社店主室研修は本社をはじめ各店、製油所等に勤務する社員の内より例年春・秋に三～四十名前後を選抜し四十日間にわたって社員教育を行っている。

同研修は今回で第十四期（回）を数えるに至っている。特にこの研修においては最終課程として当大社での三泊四日にわたる研修が必修として組込まれている。

今期の研修には二十九名が選ばれ東京での四十日間の研修を終え四月二十四日新幹線で来福、同日夕刻当大社へ到着参拝の後、研修会場兼宿所にあてられている本殿横宿舎に入り最後の研修日程が始まった。

第一日目は夕食後、当大社職員から研修に対する心構え、特に神域における数々の遵守事項が厳しく言いわたされた。

次に神職の服装である白衣白袴が支給され着付説明があった。研修生一同初めての体験で教える側の職員は流石に「ぎこちない」の呈であった。この後深斎（けっさい）を行い、鎮魂の行が拝殿に於いて行なわれ、第一日目の日程を了えた。



第二日目は午前六時起床、三十分～一時間単位の教程が組まれ午前七時朝拝を兼ね研修始業奉告祭を行い午前中は境内清掃、祭祀実習、慕津宮司の講話等が行なわれ午後は課題研修、祭式実習等、夜は鎮魂、反省会等を行い二日目をうえた。

第三日目は当大社中津宮参拝が組まれ、朝の教程を了えると私服に着替え午前九時辺津宮を出発神湊より船で大島に渡り中津宮参拝の後職員の案内で沖津宮遥拝所より沖津宮参拝を行い、島内見学の後中津宮務所で沖・中両宮の歴史等の講話を聞き午後三時大島を離れ辺津宮に帰着した。夕刻より感想発表、引続き当大社職員との懇談会が行なわれた。長かった、四十余時間の研修、特に最初で最後であろう白衣袴姿での当大社研修等について宗像名物の「カンワのスキ焼」を囲みながら夜の深けゆくまま語り合った。

第四日目は最後の白衣白袴姿になり研修終了奉告祭を行い、朝食の後、私服に着替えそれぞれの職場へ元気に帰任していった。

◇門司支店研修◇

本社店主室研修に先だつ四月十三日～十六日の四日間、同社門司支店営内の職場から選抜された十五名の社員研修が初めての試みとして当大社で行なわれた。

日程は店主室と同様に組まれていた。特に同支店研修においては「神明奉仕の精神を通し将来の有為なる社員を育成する」という目標に企画された。又、研修課題として「日本人（出光人として）を考える」をテーマとして当大社々頭実習、神社・神道の研究、当大社史の学習等、数々の体験並に実習をもとに有意義な研修を了えた。

尚、門司支店に研修感想文を依頼し寄稿を得ましたので左記掲載致しました。

―宗像大社研修を受講して―

一、この研修を受けてどんな点で効果があったと思いますか。

○此度の様な体験は二度と無い貴重な経験であった。

○神事というものが日常生活の中に以外と上け込んでいると感じられた。

○神拝作法等見よう見まねで行っていたが、その意味を理解し、納得でき行動できるようになった。

一、最も印象に残った事

○古来より継承の慣習、礼儀作法、伝統等を守り残して行かなければならないと感じた。

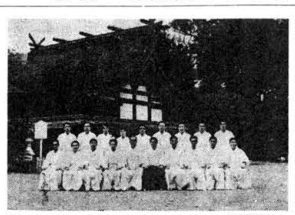
一、これからのあなたにとって最とも重要だと思ったこと。

○研修で体験したことを日常生活、職場などに生かし常に奉仕の精神、礼節を重んじ、何事にも誠意をつくし、感謝の気持を忘れず行動すること。

一、この研修をどのように感じましたか。

○神社での体験が職場、日常生活等に関係ないと思っていたが多くのことが基本に流れていると感じられ有益であった。

以上



西ドイツ ボン大学　教授・H・ツアヘルト博士参拝

四月二十三日、ボン大学名誉教授Hツアヘルト博士が夫人と共に当社を参拝された。博士は前日、博多全日空ホテルで開かれた香椎宮木下宮司の独訳古事記出版祝賀会のため来日された。参拝后の感想を博士は次のように語られた。「永い間の念願であった宗像大社の参拝が叶えられて真に嬉しく思います。本当に日本の魂のふるさとに来た思いがしました」

奉納演武
日本武芸司八光流柔術

去る四月十二日後一時、当大社拝殿に於いて日本古武道の流れをくむ「日本武芸司八光流柔術」の奉納演武会が厳粛に行なわれた。

当日は同流師範、野田寿氏外高段者五名により、まず拝殿に於いて同流の形奉納が数々奉納され、引続き本殿境内で実戦さながらの模範演武が行なわれた。

尚、同流師範野田寿氏は像町河東に居住され武道のみならず、詩吟にも精通され、又神の心厚く当大社秋の時詠大会には絶大な協賛と奉仕をされている。

今後の同流の益々の御発展を祈念致す次第である。

第七回
西日本菊花大会要項決定!!
―宗像大社菊花会役員会開催―

宗像大社菊花会の役員会が去る四月二十四日午前十時より当社斎館に於いて開かれ、定期役員改選又十一月一日より開催の第七回西日本菊花大会に関する重要案件等が審議された。

慕津宮司・高原会長の挨拶の後先づ役員の改選の審議に入った。これは一応各地各会一名の代表者をもって選考委員会を組織し、別室に於いて会長、副会長、理事長の人選を行うことに決定。ただちに斎館応接室で選考を行う。委員会は十七名の代表者で組織し、川崎委員（筑豊菊友会）を座長に選出し協議を行ったが、現会長の再任を願う意見が大勢をしめ現会長以下三役の留任が決定した。川崎座長は選考委員会の意向結果を役員会に報告、役員会これを承認し正式に会長以下三役が決定した。

次に本年度花展の出品規約同要項の審議が行われ次のように決定した。

。大輪の部

一二鉢、三列四段、大輪は十二鉢十二品種組を基準として、高さは最前花が最低なら花頭を一m とし、最後花を同一・五m とする。花壇の前の位置は柱の内側より十五cm とする。盆養を正面から見て花の位置は前二花（地人）後一花（天）作りとして花の色は二色が望ましい。物が数鉢入っても良い。鉢は九寸鉢。

。盆栽の部

白・黄・色物の三色、三品種。岩付・直幹・文人作・寄植・普通盆栽等々形の変ったもの三種類、三鉢組一組を規準とする（但し、岩付、木付は同格扱いとする）

。懸崖の部

規準出品作品は次の二段階とする。

枠付作り懸崖赤白黄三鉢組一組
自然作り懸崖赤白黄三鉢組一組

。特作の部

イ、福助作りの部

厚物、厚花壇に懐る四十五cm（花頭より鉢底まで）以下とする。出品鉢は六鉢とし、赤白黄各二鉢六品種、但し鉢は五寸とする。

ロ、競技花の部

大輪作り一鉢出品競技を行う。花名　大芳月美（白）鉢は九寸

ハ、切花の部

一輪組を規準とする。首下五十五cm、添付は黒塗。出品花は審査当日午前中までに各自搬入。

ニ、管物、一文字、鱗峨菊、肥後菊花壇の部

四鉢組を規準とする。

ホ、総合花壇等特別作品の部。

出品自由

ヘ、盆景の部

一鉢組を規準とする。

ト、千輪作りの部

一鉢一株三千輪以上とする。

。普及競技の部

新人育成の為、この部を設ける又注意事項も次のように決定した。

1、大輪、管物、一文字、鱗峨菊、肥後菊、花壇は審査当日七分咲を標準として下葉の脱落は三枚の変葉までが望ましい。輪台はあまり目立たないものが望ましい。

2、懸崖は審査当日一勢に咲揃う状態のものが望ましい。

3、盆栽は審査当日数輪開花しているものが望ましい。

他に審査規準に関する問題、開催式、総会、講習会に関する問題等に対し活発な意見の交換が続き次々と重要案件が成立決定した。

以上をもって会議を終了し昼食後清明殿に於いて九州大学農学部上木俊平教授の菊花講演会が開催された。会場は菊花役員を始め会員・地元宗像郡内の菊花愛好者百余名が集合し講演、好評を博した。

新役員（敬称略）

名誉会長　慕津　嘉之　宗像大社
顧問　樋口　芳郎　宗像郡
会長　高原　鹿吉　粕屋郡
副会長　伊藤　富夫　飯塚市
〃　駒山　直次　門司区
〃　高田　太助　八幡西区
〃　古屋　謙助　福岡市
〃　大平喜代松　佐世保市
〃　橋口　武夫　武雄市
〃　堀尾　米吉　熊本市
理事長　高島　茂人　遠賀郡
運営理事　楢本　正　宗像大社
〃　俣野　辰雄　戸畑区
〃　古荘蔵正忠　八幡西区
〃　森田　長命　直方市
〃　小沢　新助　宗像郡
〃　佐野　功　門司区
〃　杉下　松雄　戸畑区
〃　竹内　豊　小倉南区
〃　川崎　正木　嘉徳郡
〃　溝口　勇三　佐世保市
〃　坂本　寿一　佐賀市
〃　平野　直義　若松区
〃　黒岩九州男　三井郡
〃　常岡　勇　粕屋郡
〃　中山　一郎　玉名郡
〃　伊達　学　若松区
理事　安永　秀喜　飯塚市
〃　田代　定　〃
〃　池上　福元　門司区
〃　西河　貞男　直方市
〃　矢野　定　粕屋郡
〃　青谷貞五郎　八幡西区
〃　柏木幹次郎　八幡西区
〃　武藤　強　〃
〃　塩川　辰雄　八幡西区
〃　岡村　弘　佐世保市
〃　松永　伝栄　武雄市
〃　岡崎　常雄　熊本市
〃　吉崎　三吉　宗像郡
〃　野上　一実　田川市
〃　蔵田　協　八幡西区
〃　水田すみ子　久留米市
〃　時田　義光　鳥栖市
〃　伊藤　隆男　若松区
〃　大森　忠夫　若松区
〃　吉田　耿　宗像郡
〃　内藤　熊雄　〃
〃　松岡　勝美　戸畑区
事務長　三浦　常男　〃
〃　堤　宏　宗像大社

話題の新車をみる　(二)
コスモ・レシプロ二〇〇〇の巻

東洋工業は去る三月十八日、新レシプロ二〇〇〇ccエンジンを搭載したコスモ二〇〇〇AP車を発表、同日から発売を開始した。

このところ好調な売れ行きが続いている「コスモ・シリーズ」であるが、ロータリー車に比して価格的に買いやすいレシプロ車への需要が更に高まってきているという。つまりロータリ車とレシプロ車（一八〇〇AP）における動力性能の開きをつめることが、排気量アップしたコスモ二〇〇〇APである。

これまでの処、コスモAPは五〇年十月の発表、五一年六月にレシプロ一八〇〇のAT車を追加且つボディカラーに新色を増す等のほどんど変更なく、今回の新登場の措置がとられ、現在に至っており、コスモのエンジンは四種類になり一層の充実をみた。

すなわち、①12A型RE②13B型RSW-C型一八〇〇、そして新たに加わった④MA型二〇〇〇である。

一九七〇ccの排気量を得ている。これによって出力は一一〇PS/五三〇〇rpm、最大トルク4気筒・OHC機構をもつMA二〇〇〇エンジンは、VC一八〇〇のストロークを一〇㎜伸ばし一七Kgm/三〇〇〇rpmを発生しており、2バレル気化器一個で一一〇PS、一七Kgmというコスモ二〇〇〇APのパワーとトルクは他銘柄車の2ℓ6気筒インジェクション付きに匹敵する強力なものであり、また最大トルクは三〇〇rpmという低い回転域にあり、市街地走行や登坂にかかわりの結りを発揮する4気筒エンジンと云えよう。そして最大のセールポイントはその秀れた燃費性能にあり、六〇Km/時定地燃費は一九Km/ℓと発表されており「低燃費車」と言えよう。

この経済性は、新しく採用した排出ガス対策〝マツダ希薄燃焼石式〟の産物であって、高速渦流状に吹入した薄い混合気をフルトランジスター・イグナイターの強スパークで一気に燃焼させようという構造を変えることなく希薄燃焼を可能にしているので、燃焼がスムーズで、機械的な負荷も少なく良い燃焼性能が得られている。

コスモ二〇〇〇APの外観は、これまでのコスモ＝シリーズとは同じであり差異は見られない。

エンジンの外、メカニカルな面では新しいギヤ・レンオの五段ミッションが用いられていることが唯一の違いと云えよう。

宗像大社歌会
俳句作品集（一七三）

藤沢市　玄洋子

辺津の宮若葉に朱殿鎮もれる

福間　廣渡一寸毛

口ずさむ詠歌の声や春深し

落葉焚く札所の横に廻り風

土穴　八尋　恒夫

登山口早やはや告広レストラン

津屋崎　井浦　良介

ラブホテルの灯は台北の空焦がす

宗像　力丸　一郎

松ぼりも柳に親し春の月

宗像　有吉　春子

春愁や燕飛び交う歯科の窓

名古屋　野崎　傳三

葉ざくらの下に寄進の筆はぶ

紀州路の薫風然に余しゆく

宗像　岡田　無名

桜見の宴酣や月のぼる

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦

―出光佐三の事業理念―

第十章　遠い高い目標

あすなろの歌

子供たちは、佐三にふれた手の感触、佐三から受けた感動を、いつまでも残しておきたかったのである。

出光では、子供たちの二つの文集と佐三の講演をまとめて、一冊のパンフレットにした。

「日本人として
真心の鐘を鳴らせないように」

というのが、その題名である。

日本人の世界的使命

出光興産は四十七年一月、新しい首脳陣を決めた。店主佐三、会長計助、社長石田正実、副社長大和勝、加藤正である。創業者店主の佐三は、会長をやめ店主一本となった。

「突然のトップ交替」と新聞は書いたが、役員会では談笑のうちに決った。水が低きに流れるように、自然に落ちつくところに落ちついた。

佐三は四十一年十月、社長を計助に譲っていらい、全国を回って「日本人の世界的使命」を説いている。

「日本人の世界的使命」とは何か。佐三の論理と主張は、つぎのように要約することができる。

一、こんにちほど、世界中の人びとが平和を願い、福祉を望んでいる時代はない。それなのに、反対に世界の混乱の度は深まるばかりである。

原因は何か。それは、モラルによってものごとを解決しようとするからである。征服者によって作られたモラル、そこから派生する権利意識、個人主義、対立闘争の思想では、混乱する世界を救うことはできない。

一、日本には、真心から生まれた道徳がある。「恩」を知り「ありがとうございます」という感謝の念を持つ、それが道徳の根本である。

皇室が示された「無我無私のあり方、これが道徳の基礎であり、ここから「互譲互助」や「恩」「犠牲心」などが生まれた。

こうした日本の道徳こそが、世界の混乱を救う道である。

一、しかし、日本人が祖先から受け継いだ道徳は、敗戦後の占領政策によってこわされてしまった。占領軍から押しつけられた新憲法、教育法、労働法によって、日本人が「日本人はだめなれ」することになった。

日本人の世界的使命

これでは、日本人が世界の混乱を救うことはできない。

一、日本の道徳を外国の人たちにわからせ、世界の永遠の平和と人類の福祉を実現する。難事業だが、これぞ出光、日本人がめざす「遠く高い目標」である。日本人の世界的使命である。

この目標、使命を達成するためには、まず日本人が道徳とモラルの違いを知り、一日も早くほんらいの日本人にかえることである。

これが、佐三が繰り返しうむことを知らない話の筋道である。

いうまでもなく、こうした佐三の考え方は、創業いらいの理念、主張である「人間尊重」と「大家族主義」から生まれ出るものである。六十年を超える出光の経験から、佐三は「日本人の世界的使命」を導き出し、信念として固めた。

四十七年の夏から秋にかけて、出光では全国各地で佐三の米寿を祝う「家族会」を開いた。各地で、販売店も含め数千人の従業員、家族たちが集まり、おたがいに出光大家族の一員としてなごやかに歓談した。

佐三は、赤いぼうしとチャンチャンコを贈られ、振り袖姿のかわいい女の子から「おじいちゃま、おめでとう」と、祝いの言葉とともに花束を受けとった。

出光の内部には、人間尊重、大家族主義のあり方は完全に根をおろした。もう、どんなことがあっても、出光は安泰である。

給油所は、日系人はもちろん米国人にも好評だという。

日本では、どこのスタンドでもやっていることだが、お客がくると「グット・モーニング」と笑顔であいさつする。窓をふく。簡単なエンジン点検をする。タイヤの空気圧を調べる。

米国人には、それが驚きなのである。

米国はチップの国である。食事をしてもタクシーに乗っても、チップを払わなければならない。それでも、スタンドはノーチップが慣習となっている。

ところが、給油所のサービスに感激したお客が、好意のつもりでチップを渡そうとする。出光の社員が「いらない」と逃げて回る。お客は「なぜ受けとらないか、失礼ではないか」と怒りだす。

慣習の違いからくるそんなトラブルもあったが、給油所を「砂漠のオアシス」と評価してくれる客がふえたという。

出光ではその米国で第二、第三の給油所を開設している。

出光興産は三十五年三月、ソ連石油公団との間に六カ年間、八百二十万トンの原油輸入契約を結んだ。

当時、通産相だった池田勇人元首相が、日ソ貿易協定の一環として佐三に輸入を要請したのである。

翌三十六年八月、ミコヤン副首相が来日した。佐三はフェドレンコ大使に招かれ、昼食をともにしながら副首相と会談した。

「出光さん、あなたは英、米の石油資本を相手に、これを抑えつけた勇者だ」

国際石油資本にたいする佐三の見方は違う。佐三は答えた。

「英、米の石油会社は、油田を開発し、こんにちの石油市場を作った恩人だ。大国人として私は多年敬意を払っている。これをやっつけるというような考えは、まったく持っていない。

しかしながら、これらの石油会社は営利を目的としているから、こちらがスキを見せれば日本の市場を独占して搾取しようとする。増産をまぬがれるためスキを見せないということは、敬意を払って日、北京で日中共同声明に調印、全世界に国交回復を発表した。

東シナ海をへだてて一衣帯水のソ連の石油にも言及した。

「あなたの国も、石油の生産が大幅にふえたではないか。これは世界的にいえば、石油界の大恩人だ。これにたいしても、われわれは敬意を払わなければならない。

私は米国、欧州各国を旅行したとき、石油会社の社長、重役に会い、ソ連にあれだけ石油が出るようになったのだから、市場を分けてやるのが本当ではないか、といった。日本市場に関するかぎり、私が仲介に立ってソ連の石油を輸入し、平和な市場を作っている」

「私はここ二年半ばかり、石油ひとつ取りあげても英、米とソ連が仲良くいく道があると、日本の石油市場で平和な行き方を見せてきた。これからも、そういう目的のために、ソ連の石油を取り扱いたい」

四十二年一月、こんどはバイバコフ副首相が訪れた。

千葉製油所で開いた展食会で、佐三は歓迎のあいさつを述べた。

「私は戦前、満州、大陸にしばしば行き、ソ連のかたがたも親しくしておりました。ソ連の人たちが日本人に似て、非常に正直で素朴であることを知っております。私はソ連の人たちが好きです。また石油のうえでも、この八年間、相互に信頼をもって取り引きを続けております。なにごとによらず、お互いに助け合うことが大切だと思います」

佐三は四十一年「マルクスが日本に生れていたら」（春秋社）というエッセーを書いている。

「わが社には資本家はいない。われわれはつねに、働く人のため、ということでやっています。もし、マルクスが日本に生まれていたら私のようになっていたでしょう」

これには、バイバコフ副首相をはじめソ連の代表団も、どっと歓声をあげた。いま日本とソ連の経済協力による西シベリア・チュメニ油田の開発計画の構想が進みつつある。

田中首相、周恩来首相ら日、中国交回復は四十七年九月二十九日、北京で日中共同声明に調印、全世界に国交回復を発表した。

東シナ海をへだてて一衣帯水の間にあり、有史いらい親密な交流を続けてきた両国が、不幸な戦争状態の終結を確認し、ふたたび手を結び合った歴史的瞬間であった。

これに先だつ八月二十二日、稲山嘉寛新日本製鉄会長を団長とする日本経済人訪中団が羽田空港を出発、中国国際貿易促進委員会と国交回復後の経済交流について話し合った。三十日夜には、北京の人民大会堂で周首相と歓談した。

石油業界の代表格として訪中団に加わった計助会長は、中国原油の輸入について提案した。

「十年、二十年かかってもよいから、現在の日本の需要の半分くらい、約一億トンを期待したい」

周首相は答えた。

「中国から一億トン輸出するとなれば、生産量が五億トンから八億トンなければならない。私はまだ、それほど雄大な夢を持っていないが、七千二百人のあなたの志に敬意を表します」

さらに、かたわらの李先念副首相を指して言った。

「李副首相は、十年たってもまだ私よりひとつ若い。その提案は李副首相に実現してもらいましょう。もっとも出光先生は非常にお元気そうだから、十年たってもだいじょうぶでしょう」

翌四十八年一月、富永武彦出光興産常務を団長とする石油交渉団の方々と、合計十三百人の大家族会が開かれ、それが私の米寿の祝賀会となった。ホテルでもそのような祝賀会はなかった。

四十七年八月、佐三は「オイルダイジェスト」につぎの一文を寄せた。米寿を迎えた佐三の心境をよくあらわしている。全文、引用する。

「山桃　ありがとう」

私が五年前、目黒（現在の青葉台）の新宅に移ったときに、社員一同から山桃の木二本を贈られて祝ってもらった。その一本が、門を入った前庭の突き当たりの一隅に植えられた。

私は生れつき弱く、神経衰弱症で憂鬱でよくよくする性分であった。一般の人は、朝が最も気持ちのよい朗らかな時であるのに反して、私はその朝が最も憂鬱である。その憂鬱症が老後慢性となって、新居に移っても、朝の七時すぎと理由なしにくよくよする日常である。なんのためにくよくよしなければならんのかと反省しても、出光は曼珠沙華ではないが、これが出光の確信である。

出光は、その世界的使命を直接、会社単で実行しようとしている。

佐三は、日本、出光を知ろうとする外国人には喜んで会う。四十七年だけでも、ロンドンエコノミストの東洋特派員H・J・ストークス氏、米国ハイオ州のバリー社社長ゴードン・ザックス氏、ソ連科学アカデミー民族学研究所アルチノフ教授らユネスコ関係者、憲法学者と意見を交換している。

米国では給油所を開設し、ソ連、中国などとの交流も深めつつある。

米国の太平洋岸、ロサンゼルス市の郊外にガーデナ市がある。ロサンゼルス大都市圏に含まれ総人口約七万人、うちほぼ半数が日系市民である。

市のサウス・ウェスタン通りに、出光の給油所がある。国内での給油所と同じように「アポロ」のマークと、佐三自筆の「出光」の看板を掲げている。

出光興産が全額出資した米国法人「ゲデミツ・アポロ・コーポレーション」の第一号給油所「ガーデナ・サービス・ステーション」で七人の出光社員が働いている。

給油所が開かれたのは、四十六年七月一日だった。ガルラ石油のスタンドを一括借り受けたもので、米国では中どころの大きさである。

日本の石油業者が外国で給油所を開いたのは、もちろんこれが初めてである。

出光がなぜ、米国で給油所を始めたのか。

佐三は七人の社員が出発するとき、食事をともにしながらこう言った。

「君たちは、米国に油を売りに行くのではない。日本人の姿というものを、米国人に示してもらいたいということと、敬意を払って働いてきてほしい。

合い、仲良く一致団結して働く日本人の姿を、米国人に見せてくれをやっているまでだ」

私は日本人として、やるべきこと

「年中人事」

早速四月号に引続き、元服より話しを進めます。

大人の従来のみずらは頂上に一結する冠下の束髪となり、童児はみずらに似たおすまきで、耳の両方に髪を垂れ結んでいた。これが冠礼の時、大人のように頂上に束ねてもとりをつくり、冠をかぶるのである。したがって元服のことをはつもとい（初元結）ともいった。また童児の服から大人の服、すなわち闕腋袍（けつてきのほう）から縫腋袍（ほうえきのほう）になる。このようにしてすべてが大人の形になると共に、貴賤階級では社会的にも大人の位階がつき、多く五位をその出発点とした。したがって権勢家の子息は十歳から十五歳で元服するのをつねとした。

この元服の式には童児の髪を大人の形に整理する理髪と、冠を加える加冠、冠を加えてからそれをとどめる結髪とがおもだった役目である。この加冠の者を「ひきいれ」といい、重要な地位の人を選ぶ。天皇及び皇太子の場合は、加冠の前に空頂黒幘（くうちょうこくさく）というものを額につけて、冠の座に出られるが、一般は露頂で、加冠の人が能筆の役をもつとめるのである。この形式は長く公家で行われたが、近世からは元服に烏帽子を着ける風習となった。

武家の元服

中世以後武家の場合も同じく加冠といったが、冠の代りに多く烏帽子が用いられた。古くは小結烏帽子を用い、後に常型の烏帽子に改められることもあった。元服する者を冠者といい、烏帽子を着せる者を烏帽子親、それに対し冠者を烏帽子子という。儀式の次第は武家、公家ともいえない簡略な形式となった。なお、加冠・理髪の二役があり、理髪の役人が冠者の童髪を解き、成人の髪型を整え、烏帽子親が烏帽子を取り冠者にかぶせるのである。服装は冠者をはじめ列座の者は狩衣・直衣などが通例である。

こうした者は、それまで用いられていた童髪を改め、公家と同じように垂髪を用いることになるのであるが、多くは父祖の諱（いみな）や烏帽子親または貴人の名の一字をもらいうけるのが例で、これを名乗りとした。

また武家では元服を神社の社頭で行うことが多く、室町時代の武家の童児は喝食（かつしき）姿が児姿で、服は水干や素襖であった。江戸時代には、前髪の角（すみ）を後ろの半元服とも額直しともいい、前髪を全部おとして、月代（さかやき）を剃るのを本元服というて二度行われた。被りものをつける風はなくなったが、袖留（そでとめ）と称して、半元服の時八つ口を縫いふさいでこれを祝った。

また元服は貴族・武家ばかりでなく、民間にも行われたが、その作法も簡単で、十八、九才に前髪を払って総髪結で袖留につくらいのことであった。

女子の元服

女子にも成年式は古くから行われたが、初めは髪形の変化で表現された。すなわち古代には女児は放髪（はなちがみ）であったが大人になると結髪をする。すなわち髪上げの儀式がそれである。この結髪には笄（こうがい）を必要とするところからこれを笄（こうがい）ともいった。しかし平安時代になって垂髪が大人一般の髪形となったので、成人式は着裳（ちゃくも）に移って、形式的なかみあげの儀式と着裳とが同時に行われたが、初めは髪形の変化で表現された。すなわち古代には女児は放髪（はなちがみ）であったが大人になると結髪をする。すなわち髪上げの儀式がそれである。この結髪には笄（こうがい）を必要とするところからこれを笄（こうがい）ともいった。しかし平安時代になって垂髪が大人一般の髪形となったので、成人式は着裳（ちゃくも）に移って、形式的なかみあげの儀式と着裳とが同時に行われるようになった。その年齢は十二、三才から十六才であったが、男児の加冠者と同様、この場合は裳の腰を結ぶ人が重要な人物となり、貴人や親戚の長者を選んだ。

ところが鎌倉時代以後は平生の服装に着裳形式がなくなったので、近世では小袖の形式の変化でこれを現わすことになった。すなわち幼児の腰開の小袖を公式袖（そでそで）・わきつめなどいう）が女子の成人式となった。袖留が十六才の六月十六日に多く行われるので、後にまたこれを月見ともいって、饅頭に宮城野の萩で作った雁をさして穴をつくり、月をながめる習慣なども起った。

（終り）